

VIII 鹽竈神社のあらまし

鹽竈神社は、海拔 57m ほどの一森山に鎮座^{ちんざ}している。古くから漁業や製塩の守護、安産^{しゅご}の守護^{ぶとく}、武徳の神として全国に知られている。総面積 28ha ほどの境内の多くは森林で、宮城県の風致保安林に指定されている。

1. 御祭神

鹽竈神社には、左宮^{さぐう}、右宮^{うぐう}、別宮^{べつぐう}があり、左宮には武甕槌神^{たけみかづちのかみ}、右宮には経津主神^{ふつぬしのかみ}、別宮には塩土老翁神^{しおつちおじのかみ}がまつられている。

言い伝えによると、塩土老翁神を道案内として武甕槌神・経津主神の二神が海路を渡って塩竈においでになり、東北地方を平定したのち塩竈に帰還されたといわれる。

その後、武甕槌神・経津主神の二神は他に移られたが、塩土老翁神は塩竈に残られ、塩のつくり方を教え広めるなど人々をお導きになったとされている。

このような塩土老翁神の御神徳から、海上安全や漁業の神、塩づくりの神として信仰されたほか、出産と潮の満ち引きに深いかわりがあると考えられたことから、安産の神としても広く信仰された。また、武甕槌神・経津主神が名高い武神であることから、武徳の神としても広く知られてきた。

市内には鹽竈神社の末社である「御釜神社」があるが、ここには塩土老翁神が塩づくりに使われたという鉄釜が伝えられている。一説ではこの塩づくりの釜が、塩竈という地名の由来となったとも言われている。



一森山に鎮座する鹽竈神社

2. 鹽竈神社の格式

鹽竈神社は「奥州総鎮守^{おうしゅうそうちんじゆ}」とも呼ばれ、東北地方でも第一の神として敬われてきた。江戸時代には朝廷から「正一位」という最高の位を授かっており、明治時代には「国幣中社^{こくへいちゅうしゃ}」とされた。

3. 鹽竈神社の造営ぞうえい

(1) 天正の造営てんしょう

中世の記録によれば、1356年（文和5年）と1360年（延文5年）に造営がなされたようであるが、詳しいことはわかっていない。その後、1581年（天正9年）から1589年（天正17年）にかけて、留守政景るすまさかげによって御社殿の造営がなされているが、どの程度の規模であったかはわからない。

(2) 慶長の造営けいちょう

記録によれば、1607年（慶長12年）に伊達政宗により鹽竈神社の造営がなされているが、その規模や様式はわかっていない。この後、二代藩主の伊達忠宗だてただむねにより1644年（寛永21年）に拝殿が造営され、1650年（慶安3年）に長床が造営されていることから、伊達政宗による造営は本殿を中心としたものであったと考えられている。

(3) 寛文の造営かんぶん

慶長の造営のあと、50年ほど過ぎて1659年（万治2年）頃から再び御社殿の造営が行われ、1663年（寛文3年）に完成した。記録によると、この寛文の御社殿は本殿と拝殿を石の間でつないだ権現造りの建物で、東側に貴船社きぶねと只洲社ただすの二社が建てられていたことがわかる。また、黒漆塗りで彫刻や彩色がなされた華やかなものであったとされていることから、現在の御社殿とは大きく異なるものであったようである。



寛文社殿の配置

塩竈大明神絵図（『御修復帳』）
貞享三年ごろ 宮城県図書館蔵

(4) 元禄の造営げんろく

寛文の御社殿が完成してから30年ほどのち、大がかりな御社殿の建て替えが行われた。四代藩主伊達綱村だてつなむらは、鹽竈神社の歴史について調査を行い、1693年（元禄6年）に「鹽竈神社縁起えんぎ」という鹽竈神社の正式な御由緒ゆいじよをとりまとめた。これにより鹽竈神社の御祭神が三神と定められたのに対し、寛文の御社殿では本殿が一つしかなかった。このため、1695年（元禄8年）から建て替え工事が行われ、五代藩主・伊達吉村だてよしむらのとき1704年（宝永元年）に三つの本殿と二つの拝殿からなる御社殿が完成した。これが現在の社殿である。この宝永の御社殿では、左宮と右宮の二つの本殿と一つの拝殿からなる左宮

右宮の御社殿が南向きに建ち、その東側に一つの本殿と拝殿を廊下でつないだ別宮の御社殿が西向きに配置されている。このうち左右宮の拝殿と別宮の拝殿は、寛文の御社殿を改造して用いたものである。

(5) その後の造営

元禄の造営の後、歴代藩主は神社の管理に力を尽くし、概ね20年ごとに屋根の修理などを行った。工事の時には、神様に仮の御社殿にお移りいただく遷座祭というお祭りが行われた。このため、20年ごとの修理は遷宮とも呼ばれてきた。

鹽竈神社の遷宮は現在まで続けられており、2011年(平成23年)には第18回鹽竈神社式年遷宮が行われた。



宝永社殿の配置
一宮絵図(『神社絵図』)
仙台市博物館蔵

4. 鹽竈神社の主な建造物

鹽竈神社の境内には、多くの建造物がある。このうち、表参道の石鳥居、隨身門、門と廻廊、左右宮拝殿、別宮拝殿、左宮・右宮・別宮の各本殿、瑞垣などは、寛文から元禄・宝永にかけて江戸時代の中頃に造営されたもので、規模が大きく丁寧につくられており、配置もよく工夫されているなど、優れた神社建築として有名である。これらは、鹽竈神社の歴史や建築の歴史を考えるうえで貴重な文化財であることから、1959年(昭和34年)に宮城県指定の文化財となり、2002年(平成14年)には国の重要文化財に指定された。

(1) 石鳥居

表参道の入口に「陸奥国一宮」の大きな銅製の額がかけられた石の鳥居がある。

この鳥居は、寛文の造営のときに建てられたものである。額の文字は姫路藩酒井家二代藩主の酒井忠以が書いたもので、江戸時代には現在の博物館近くにある石鳥居にかけられていたが、明治時代に現在の場所に移された。



表参道の石鳥居

(2) 隨身門ずいしんもん

鳥居をくぐると、202段の急な階段がある。両側の手すりを頼って階段を登ると隨身門がある。

この門は二階建てで、南側両側には門を守る一對の隨身像、北側両脇には鹽竈神社のお使いとされる一對の鹿の像が安置されている。



隨身門

(3) 御社殿

隨身門をくぐると正面に門と東西の廻廊かいろうがある。この門をくぐると正面に左右宮拝殿、右側に別宮しゅぬ 拝殿いりも やづくがある。拝殿はどちらも朱塗りの入母屋造りで、屋根は銅板葺どうばんぶきである。

左右宮拝殿の奥には左宮と右宮の二つの本殿、別宮拝殿の奥には別宮の本殿があり、拝殿と本殿は廊下でつながれている。造営にあたっては、奈良県の春日大社や京都府の賀茂神社の建築様式を参考にしたとされている。



左右宮拝殿



別宮拝殿

5. 境内をめぐる

(1) 文治の鉄灯ぶんじ てつとう

社殿のまわりには、たくさんの文化財がある。左右宮拝殿の右側手前ふじわらひでひらにある鉄製の灯籠は、1187年(文治3年)に藤原秀衡いづみさぶろうただひらの三男である泉三郎忠衡きしんが寄進したものとされている。石の台座を合わせた高さは2.4mほどで、のちに補修されたものではあるが銅製の扉ほうのうに奉納の銘文がある。

1702年(元禄15年)に刊行された松尾芭蕉まつ お ばしやうの「おくのほそ道」において、「神前ほどうに古き宝燈有り、かねの戸びらの面おもてに文治三年和泉三郎寄進と有り、五百年來の倂、今日の前おもてにうかびて、そぞろに珍し…」と紹介されて有名になった。

1803年(享和3年)に鉄灯のまわりを囲むように設置された石の柵には、地元の人々らによって詠まれた俳句が刻まれている。



文治の鉄灯

(2) 文化燈籠

門をくぐって左側に、鉄と銅を組み合わせで作られた高さ約4.8メートルほどの大きな燈籠がある。この燈籠は、江戸幕府の命令により仙台藩が蝦夷地(北海道)の警備を行った際、鹽竈神社に安全を祈願したところ無事に警備を終えることができたため、1809年(文化6年)に九代藩主の伊達周宗によって奉納されたものである。竿の部分に奉納の理由を示す銘文が刻まれている。



文化燈籠

(3) 日時計

左右宮拝殿に向かって左側手前に、石で作られた日時計がある。これは、林子平が長崎遊学の折、出島にあったオランダ製の日時計を模写し、それを基に藤塚知明が仙台の石工に作らせ、1792年(寛政4年)に奉納したものである。境内にあるものは複製品で、実物は博物館に展示されている。



日時計

平らな石盤の上に時刻を表す線とローマ数字が刻まれており、中心にある鉄線が石盤に落とす影の位置によって時刻を知ることができる。

(4) 鹽竈ザクラ

鹽竈神社の境内では、多くの品種の桜をみることができるが、なかでも鹽竈ザクラは古くから有名である。サトザクラ系の八重桜で、例年4月下旬から5月初旬にかけて満開となる。花は淡い紅色で花弁が多く、めしべが緑色の小さな葉となる特徴がある。鹽竈神社の御社紋は、鹽竈ザクラの花を図案化したものである。



鹽竈ザクラ

平安時代の堀河天皇が詠んだとされる和歌に、「あけくれに さぞなめでみむ 塩竈の さくらの本にあまのかくれや」とあるように、古くから和歌に詠まれてきたほか、江戸時代の本草学者である貝原益軒が著した「大和本草」をはじめ、多くの書物に紹介されている。

1940年(昭和15年)に別宮拝殿そばにあった老木が天然記念物に指定されたが、この木はやがて枯れてしまった。その後、接木して若木を育成するなど多くの人の努力により、1987年(昭和62年)に鹽竈神社境内の鹽竈ザクラが再び天然記念物に指定された。

(5) タラヨウ

タラヨウは、モチノキ科の常緑樹で大きく厚みのある葉をつける。本州では静岡県より西に自生し、高さ 10m ほどになる。葉の裏を堅いものでなぞると黒く変色し文字を書くこともできる。鹽竈神社境内の各所にみられるが、なかでも左右宮拜殿左手前にある木は高さ 10m を越える巨木である。

植栽できる北限にあたる地域で大木となることはめずらしいため、1970 年（昭和 45 年）に宮城県の天然記念物に指定されている。



タラヨウ



ろう梅

(6) ろう梅

ろう梅は、クスノキ目ロウバイ科の落葉樹で、江戸時代に中国から渡来した。2月頃に咲く花は、黄色く半透明でつやがあり香りが強い。花のようすが、ろう細工のようであることからろう梅と呼ばれるとされる。

志波彦神社近くにあるろう梅は、江戸時代に林子平はやしし へいが長崎で手に入れ、鹽竈神社の神職である藤塚知明ふじつかともあきに贈ったものとされている。

6. 志波彦神社

鹽竈神社御社殿の北東、塩竈のまちなみと港を見晴らす位置に志波彦神社がある。御祭神は志波彦神で、国土開発や産業振興、農耕守護の神として崇敬されている。平安時代の記録にもみられる格式かくしきの高い神社で、1871 年（明治 4 年）には国がお祭りにかかわる「国幣中社」とされた。伝承によると、志波彦神はしおつち おじのかみ塩土老翁神とともに人々を導いたとされる鹽竈神社に縁の深い神である。



志波彦神社

もとは現在の仙台市宮城野区岩切の七北田川のほとりに祭られており、冠川明神かむりがわとも呼ばれたが、明治 7 年に鹽竈神社別宮に移され、のちに御神殿が造営されて 1938 年（昭和 13 年）9 月 29 日に現在の御神殿にお移された。毎年 3 月 29 日に例祭が行われるほか、9 月 29 日には遷座記念祭が行われている。志波彦神社の御神殿は国によって造営されたもので、当時の高い建築技術が用いられた近代の神社建築として貴重であることから 1963 年（昭和 38 年）に塩竈市の文化財に指定されている。

7. 鹽竈神社博物館

鹽竈神社博物館は、神社に伝わった宝物や歴史資料、文化財などを保存・公開し、研究や教育に役立てることを目的として1965年（昭和40年）に開館した。

1階展示室では、現在でもお祭りに使用されている鹽竈神社と志波彦神社の大神輿おおみこしをはじめ、仙台藩の歴代藩主が奉納した刀剣、鹽竈神社の歴史を知るためにかかせない古文書や絵画などが展示されている。

2階展示室では、鹽竈神社の御祭神にゆかりのある製塩や、港まちである塩竈に関する漁業に関する資料が展示されている。



鹽竈神社博物館

(1) 御神輿おみこし

鹽竈神社の御神輿は、1733年（享保18年）頃きょうほうに齋藤屋八郎右衛門さいとう やはちろう えもんをはじめ大勢の氏子たちによって寄進されたもので、全体が黒漆塗りとされている。志波彦神社の御神輿は、1964年（昭和39年）に塩竈魚市場の新築を記念して水産業者からお祭りに使用する道具しょうぞくや装束一式とともに奉納されたもので、胴の部分ほのうが朱塗りとされている。いずれも重さ1トンほどある大きな御神輿で、塩竈の人たちが自慢とするものの一つである。

「帆手祭」と「花祭」では鹽竈神社の御神輿、「みなと祭」では鹽竈神社と志波彦神社の御神輿がかつがる。御神輿には4本のかつぎ棒があるが、表参道の急な階段を通るために長さは短く、階段の幅も狭いので横にかつぎ棒をつけることもできない。このため、一度に御神輿をかつぐのは16人で、このほか50人ほどの輿丁よていが交代でかついでいる。御神輿をかつぐ輿丁は、1週間前からみそ禊ぎを行って身を清め、当日は白張はくという白い装束ちように烏帽子えぼしをかぶり、紙のマスクをかけてご奉仕している。

鹽竈神社の御神輿は、荒れ神輿として有名で、進む方向を急に変えたり、ぐるぐる回ったりすることがある。また、家の2階など高いところから見おろしたりしないのが塩竈での習わしである。



鹽竈神社の御神輿

(2) 太刀 銘 来国光

この太刀は、仙台藩四代藩主の伊達綱村が1675年(延宝3年)に世の中の平穏を願って鹽竈神社に奉納したものである。

作者の来国光は、鎌倉時代の末に山城国(現在の京都府)で活躍した刀鍛冶である。

刃の部分の長さは83.9cm、反りは3.5cmで、姿が優美である。非常に優れた作品として、1909年(明治42年)に国の重要文化財に指定されている。

この太刀には、鞘の部分に伊達家の竹に雀紋をていねいにあらわした糸巻太刀拵(鞘や柄ほか金物など一式のこと)が附属している。



来国光

(3) 太刀 銘 雲生

この太刀は、江戸時代まで代々が鹽竈神社の神職をつとめた春日家に伝わったものである。作者の雲生は、鎌倉時代の末に備前国(現在の岡山県)で活躍した有名な刀鍛冶である。

刃の部分の長さは92.1cm、反りは3.5cmで、長寸で豪壮な姿である。1950年(昭和25年)に国の重要文化財に指定された。この太刀には、黒漆塗太刀拵が附属している。

(4) 烏天狗と猪の大絵馬

たて約1.7m、横約2.3mの大きな絵馬で、猪に乗る烏天狗が描かれている。1803年(享和3年)に白石城主の片倉村典により奉納されたもので、1860年(安政7年)に白石の画家である川村春洋による補修がなされている。

村典の先祖である片倉小十郎重綱が大坂夏の陣に出陣したとき、愛宕権現の使いである烏天狗の導きにより手柄をたてたとされる伝承がある。このことから、片倉家では仙台藩の主だった神社に烏天狗を描いた絵馬を奉納しており、この絵馬もその一つである。



烏天狗絵馬

8. 御釜神社

本町にある御釜神社は鹽竈神社の末社^{まっしや}で当地で塩づくりを教えた^{しおつち おじのかみ}とされる塩土老翁神がまつられている。

鳥居をくぐって左側にある板の塀で囲まれた中に、^{しんかま よんく あんち}神釜と呼ばれる四口の鉄釜が安置されている。

4口のうち3口は直径1.4mほど、1口は直径1.2mほどあり、いずれも座面は平坦で盆のような形である。このうち一回り小さいものは御台の釜とも呼ばれている。神釜には海水が満たされているが、この水はかれることがなく、世の中に異変があるときには水の色が変わると言い伝えられている。

御釜神社では、毎年7月に「藻塩焼神事」と呼ばれる塩づくりの神事が行われている。この神事は、「藻刈神事」^{もがり}「水替神事」^{みずかえ}「藻塩焼神事」の3つからなる神事である。

7月4日の「藻刈神事」では、七ヶ浜町花淵浜沖に船を出し、ホンダワラという海藻^{かいそう}を刈り取ってくる。

5日の「水替神事」では、松島湾釜ヶ淵^{かまがふち}に船を出し、満潮のときの海水を汲んできて神釜の水の入れ替えを行う。

6日の「藻塩焼神事」では、ホンダワラの上から潮水を注ぎ、下に垂落^{たれお}ちた水を煮つめて塩づくりを行う。

この一連の神事は、1979年(昭和54年)に宮城県の無形民俗文化財に指定されている。



御釜神社



藻刈神事



藻塩焼神事

9. 鹽竈神社のまつり

鹽竈神社では、御祭神にお供え物をささげる御日供祭^{おにっくさい}など、毎日欠かすことなく「まつり」が執り行われている。

一年を通して行われる行事のうち、主な「まつり」として3月10日の「帆手祭」、4月第4日曜日の「花祭」、7月10日の「鹽竈神社例祭」、7月第3月曜日(海の日)の「塩竈みなと祭」をあげることができる。また、特殊なお供え物をささげる「まつり」に12月1日の「勝来祭」^{かつらいさい}がある。これらの「まつり」について紹介してみよう。

(1) 帆手祭

江戸時代に塩竈の氏子たちによって始められ、氏子が中心となって続けられてきた「まつり」は「氏子祭」と呼ばれる。帆手祭も「氏子祭」の一つで、鹽竈神社の御神輿おみこしに付き従い、子供たちを中心とした大勢の行列が塩竈市内を練り歩く。



帆手祭

江戸時代の塩竈は、港に入った船から仙台北城下に物資を運ぶことで栄えた港町であったが、1670年（寛文10年）頃に塩竈湾の牛生ぎゅうせいから七北田川河口の蒲生がもとの間に運河が開かれ、塩竈の港に入る船が少なくなって不景気となった。そのうえ、毎年のように火災が発生したことから、ますます町がさびれる一方となった。このため、鹽竈明神の力をお借りして防火と景気回復を願うお祭を執り行うことを多くの人々が望んでいた。こうしたところ、1682年（天和2年）の正月に町の若者たちが「竜のひげ」と呼ばれる草で「ぼんぼり槍」を作り、紙で作ったはっぴを着て竹の刀を腰にさすなどして町内を練り歩くお祭りを行ったという。これが帆手祭の始まりで、お祭りを執り行ってからは四代藩主の伊達綱村だてつなむらにより塩竈を手厚く保護する特令が出されるなど、町は再び栄えるようになった。景気の回復により、享保きやうほう中に荘厳な御神輿おみこしが作られるなど祭りの行列も立派なものとなっていった。1686年（貞享3年）から祭日が正月28日に定められ、1778年（安永7年）以降は「御神輿洗の神事おみこしあらいのかみぎ」と称して執り行われており、1910年（明治46年）から「帆手祭」と名称をあらためられ新暦3月10日に執り行われるようになった。

(2) 花祭

花祭も「氏子祭」の一つで、1778年（安永7年）に氏子たちによって始められた。それより10年ほど前の明和頃から、水不足などにより作物が実らないことが続いたため、1776年（安永5年）頃から正月のほか3月10日にもお祭りを行って鹽竈神社に祈願したところ、作物もとれるようになった。このため、氏子たちは毎年このお祭りをを行うことを藩に願い出て許可され、安永7年から正月のほか3月10日にもお祭りが行われるようになった。1910年（明治43年）から、お祭りの日を新暦4月25日にあらためて「花祭」と呼ぶこととされ、1985年（昭和60年）からは、4月の第4日曜日にとり行われている。花祭においても、帆手祭と同じように鹽竈神社の御神輿と大勢の行列が市内を練り歩く。



花祭

(3) 鹽竈神社例祭^{れいさい}

鹽竈神社の年中行事のうち、最も重要なものとされてきたのが毎年7月10日にとり行われる例祭である。例祭では、「御出幣式^{ごしゅつべいしき}」がとりおこなわれる。

この「御出幣式」は、別宮・左宮・右宮それぞれの本殿から御神幣^{ごしんべい}をお出しし、随神門^{ずいしんもん}の前で振ることによって世の中の平安を願う儀式である。

伝承によると、「御出幣式」はもともと国司^{こくし}がとり行なった儀式とされている。

また、この日の午後からは、鹽竈神社の馬場において「流鏑馬神事^{やぶさめ}」が行われてきたが、2009年（平成21年）から7月の第2日曜日にとり行われている。

この神事は、室町時代に領主^{るすし}の留守氏が家臣たちの士気を高めるために流鏑馬を行ったことに由来するとされる。馬に乗って駆けながら三つの的を弓矢で射る流鏑馬を、三名^{いて}の射手が三度ずつとりおこなう。



流鏑馬神事

(4) 塩竈みたと祭

「海の記念日」（7月20日）にちなみ、1948年（昭和23年）から始められた海の祭典である。初めは7月10日の例祭にあわせてとり行われていたが、1963年（昭和38年）から8月5日に変更され、2005年（平成17年）からは「海の日」（7月第3月曜日）にとり行われている。鹽竈神社の御神輿^{おみこし}を御座船^{ござせん}にのせ、大漁旗^{ふきな}や吹流しで飾りたてたお供の船を多数従えて松島湾をめぐる海上渡御^{とぎよ}が行われ、1964年（昭和39年）に魚市場の新築を記念して水産業者から志波彦神社の御神輿^{ほうのう}が奉納されてから、鹽竈神社と志波彦神社の両社の御神輿により海上渡御が行われている。鹽竈神社の御神輿をのせる御座船は、鳳凰^{ほうおう}（くじゃくに似た伝説上の鳥）をかたどった「鳳凰丸」、志波彦神社の御神輿をのせる御座船は、龍をかたどった「龍鳳丸^{りゅうほうまる}」で、船の名前は江戸時代に藩主が用いた船の名前に由来する。

2006年（平成18年）に、水産庁の「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財百選」の一つに選定されている。



鳳凰丸



龍鳳丸